

## 2020. 9. 6. 聖霊降臨節第15主日礼拝式説教

### ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書13章1-9節

『見守ってくださる主』

大勢の群衆が主イエスのもとに集まり、その話に聞き入っていた時のことです。何人かの者たちが主イエスのもとにやってきました。彼らは最近エルサレムで起こった事件を主イエスに報告したのです。それは、総督ピラトによってガリラヤ人が殺害され、いけにえの獣の血に混ぜた、という事件でした。ピラトという人物は相当残虐な人であったようで、何のためにか、ガリラヤ人を殺し、見せしめにするというような事件があったのでしょうか。

主イエスは報告に来た者たちの心の内の思いを見抜いてこう言われました。「彼らがそんな災難に遭ったのは他のガリラヤ人より罪深いものだったからだと思うか。」ここは、精確に訳すと「他のガリラヤ人と違って罪人だったからだと思うか」となり、より深い罪人だったか、ということを知っているのではなく、彼らが他の人と違って罪人だったから、そういう災難に遭ったと思うか、と尋ねておられるのです。

そして主は続けて、最近起こったエルサレムでの出来事、シロアムの塔が倒れてそれに巻き込まれて18人の人が死んだ、あの18人は他の人と違って罪人だったと思うのか、と同じように尋ねられたのです。それが報告に来た者たちや、その場に居合わせる群衆たちの胸のうちにある疑問に触れると思われたからです。

二つの事件の詳しい説明は今必要ありません。なにか不幸なこと、災難、人災にせよ天災にせよ、災難にあった人に対して、思わぬ災難に遭うのは、これまでの彼・彼女のおかした罪に起因しているのではないかと、多くの人々は考えていたのです。因果応報、という捉え方です。これはいつも言いますが、古代の人だけでない、現代を生きるわたしたちの中にも深く浸透している考え方です。大震災とか、今回のような感染拡大といったことが起こると、それは人間のおかした罪に対する罰だ、という言葉がしばしば聞こえてきます。逆に、何か災難に遭ったときに、「自分は何も悪いことをしていないのに、なぜこんな目に遭うんだろう」というのも、同じ因果応報的な考え方の逆パターンです。

この因果応報という考え方はいつの時代でも人々の心の中に宿っていて、相当にしぶといものです。例えば障がいをもって生まれた人や、長い病気で苦しむ人たちにもこの考えは普通にむけられて、そうでなくても重荷を負っているのに、さらに重荷を負わせることになっていくのです。主イエスの因果応報に対する考えは実ははっきりしていて、今日の聖書箇所でも、「決してそうではない」、と繰り返し語っておられます。それは因果応報という考えそれ自体が空虚だということです。

ヨハネによる福音書9章に、生まれつき目の見えない人を見て、弟子たちが「この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか」と尋ねる場面があります。主イエスは本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない、と言われた後で、神の業がこの人に現れるためである、と言われたのでした。ここには因果応報に捕らわれている者たちに対する主イエスの断固たる言葉がある。それは、困難や、災難や、障がいを抱えている人の過去に原因を探ろうとするのではなく、神がその人において今、そして将来において働いてくださる、そのことに視点を転換させようとしておられる。

今災いを受けているのは、誰のせいなのか。誰の罪のせいなのか。人々はそうした因果応報の考え方の中に捕らわれていた。だがキリストは因果応報的な捉え方で人生を見ることをしない。困難や災難がふりかかっているからその人は罪深い、病気だから罪深い、そういう捉え方の根を断ち切る。

そうではなくて、病気だろうがなかろうが、そのことに関係なく、人は神の前に罪人である、そのことをキリストは語られる。そしてそれは神と向き合い、神との関係の中での自分を知ることによってわかっていくことであって、災難に遭っているとか、病気になっているというようなこととは無関係なことです。かつその罪人であるわたしたちを神はどのように活かそうとしておられるのか、そのことを語る。「神の業がその人に現れる」、そのことを受けとめなさい、主はそう語りかけておられる。大事なことは、過去に遡って原因追求するような因果応報的な生き方ではなく、今と将来を神によって生かされ用いられる生き方へと転換させられていくことなのです。

キリストの弟子であったペトロは、キリストが十字架にかかる土壇場で、キ

リストを裏切って人々の前で、キリストなんか知らない、と否認しました。その彼が、復活の主に出会って「裏切り者」であるにもかかわらず弟子であり続けた。それは主イエスが裏切った者も受け入れ、弟子として招き入れ用いてくださったからです。だがそれにしてペトロは自分のしでかしたことの反省の弁も、後悔の念もどこでも語っていない。使徒言行録には彼の説教が残っているのですが、自分の裏切りについて何の反省の言葉もない。そのことを指してペトロは悔い改めていない、という人がいます。本心から悔い改めていない。だからまた、パウロとの間でもまちがいをおかしていくのだ、という人がいます。しかしそれは、悔い改めということがわかっていないところから来る誤解です。まちがいです。聖書の語る悔い改めとは、「反省」とか「後悔」ということとは全く違うことです。日本語では悔い改めの「悔」いるという字と後悔の「悔」いるとが同じなので、日本語だけで考えれば、似た言葉のように考えやすいのですが、聖書においては全く違うものです。反省とか、後悔は自分の心の中で起こること。やってしまったことを悔いること、やらなければよかったと思うことです。しかし悔い改めというのは、神との関係の中で起こること、自分の中だけで自己完結的に起こることではなく、まして心の中で悶々とするというようなことではない。悔い改めは神の恵みの中に自分があることを知ることです。神の恵みとは、神がわたしの罪のために御子イエス・キリストをお与えくださり、キリストが十字架にかかってわたしの罪と、罪の罰としての死を担い負ってくださったこと、そしてさらに復活のいのちを与えて新しく生きる者としてくださったこと、その全部が恵みです。その恵みの中にこの自分があるということを知ること、それが悔い改めです。

ペトロは悔い改めていないから、反省もせず、後悔もしていないのではなく、神の恵みの中にある自分を知った時に、反省や後悔ではどうにもならない自分の罪を知らされたし、反省をどれだけしようが、後悔して悶々とし、悔いつづけようが、自分が簡単に変わるはずもなく、反省する自分も後悔する自分も繰り返されることを知っていた。罪人であり続けるのです。しかしペトロは、その自分がキリストに背負われ、キリストによって赦され、キリストによって新たにされた、その恵みに感謝し続けることこそ、悔い改めの本領だ、と受けとめたのではないのでしょうか。

不思議なことに、ヨハネによる福音書にはこの「悔い改め」という言葉が一

度も出てこないのです。では、ヨハネは「悔い改め」をどうでもいいこととして捉えていたのか、決してそうではない。むしろヨハネは悔い改めの中身、内実を他の言葉で聞き取っていた。キリストが語られた悔い改めの中身、それをヨハネは書き記しているのです。例えばそれは、ニコデモに語ったように「新しく生まれる」ということであり、「わたしの内にとどまっていなさい」というあの葡萄の木のたとえのキリストのうちにとどまる、という言葉。それが悔い改めの中身です。

さらに主イエスは一つのたとえを話されました。それは葡萄園の主人が、葡萄園の中に無花果の木を植えておき、実を探しに来たが、見つからなかった。そこで主人は園丁を呼び、三年もの間無花果の実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ、こんな実を結ばないものに土地を塞がせる必要はない、と言ったのです。ところが園丁はこう主人に願ったのです。「今年もこのままにしておいてください」。「木の周りを掘って、肥やしをやってみます」。「そうすれば、来年は実がなるかもしれません」。「もしそれでもだめなら、切り倒してください」。

三年たって実がならない無花果。それは当時の常識としてはもうすでに切っけてしまっている木です。だがこの園丁は今年も待つてほしいと願っている。何のためにか。それは、わたしたちが悔い改めるためです。新しく生まれて、キリストのうちにとどまるためです。

たとえ今、実のならない無花果のようであっても、キリストはわたしたち一人一人のために執り成し、悔い改めを待っていてくださる。そもそもキリストの存在そのものが、わたしたちが神に対して悔い改めるために遣わされた存在なのです。キリストは今我々を見守り、悔い改めを待ち続けてくださり、神の恵みの中にあることにわたしたちが気づき、新しく生きることを待ち望んでくださっているのです。